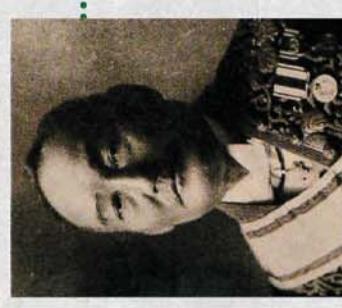


# 人々の生活の近代化に挑んだ六人の男たち

まさに劇的な変化だった。上下水道整備や病院の設立、台湾鐵道の設立、インフラ整備、製糖産業を中心とする目覚ましい経済発展…。明治31年(1898)2月、そこには、台湾のために奮闘する男たちの姿があった。

児玉源太郎(原田市美術館所蔵)、後藤新平(写真提供:公益財團法人後藤・安田記念東京都市研究所)、長谷川謹介(写真提供:新渡戸辰氏)、新渡戸稻造(写真提供:監阿市先人記念館)、平井數馬(写真提供:片倉史氏)、八田與一(写真提供:金沢ふるさと伴人館)



*Hasegawa Kinsuke*  
長谷川謹介  
....P.50

後藤の地大な信頼を受けて、台湾鐵道の監修にあつた技師。約10年かけて台湾鐵道を全通させ、「開拓の島」といわれた台湾のインフラを創的に変えた。



*Nitobe Inazō*  
新渡戸稻造  
....P.52

児玉、後藤の懇願を受けて台湾に入り、殖産局長に就任。台湾に駐在したのは僅か2年ほどだが、サトウキビ生産の改良などに取り組み、台湾の経済発展の礎を築く。



*Kodama Gentaro*  
児玉源太郎  
....P.38

第4代台湾総督。就任以来、「よりも現地の人々の生活を優先する」という信念のもと統治を行ない、台湾人の声に耳を傾けた。台湾に飛躍的な近代化をもたらした立役者。

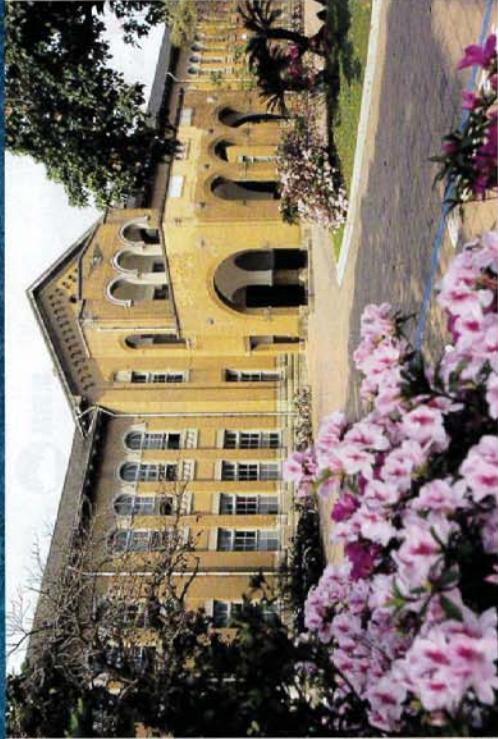


*Goto Shinpei*  
後藤新平  
....P.44

児玉の「右腕」ともいわれる民政長官。医療制度改善、衛生問題向上、インフラ整備など多岐にわたる分野で手腕を發揮し、今も「台湾近代化の父」として現地で尊かれている。



# 行倉、大学、百貨店！ 今も現役の日式の建物



## ▲国立台湾大学

旧・台北帝国大学 [1928年設立]

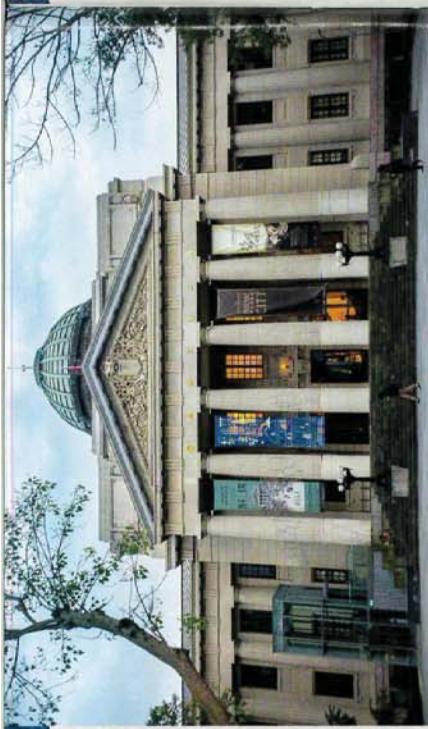
戦前は内地に設置された7つの帝大と並ぶエリート校で、現在も台湾一の難関大学。統治時代の日本がいかに台湾での教育に力を注いでいたか窺える。



## ▶中華民国總統府 旧・台灣總督府

[1919年築]

第7代総督・明石元二郎のもとで完成した総督府の行舎がそのまま使用され、重要文化財にも指定されている。曜日と時間によっては、内部も見学できる。



## ▶國立台灣博物館 記念博物館 [1915年築]

館内には、兒玉源太郎と後藤新平の銅像も保存されている。これらは、戦前まで中央ホールに置かれていた。しかし、銅像は地下に隠され、保護されていた。半世紀余りを経て、昨今再び日の目をみるようになった。

## ▼博物館内部

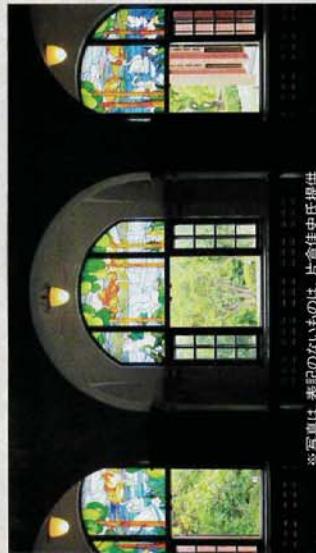
## ▼國立台灣大學 附設醫院旧館 旧・台灣總督府醫院 [1898年設立]

日本統治時代の古写真は、本特集47ページに掲載。後藤新平は、衛生環境整備の一環として、近代的な病院の設立にも尽力した。



## ▼林百貨 [1932年開業]

実業家・林方一が創立した百貨店。終戦後は商業、空きビルとなっていたが、2010年から行政による修復作業が行われ、2014年、台湾の国産商品を中心に扱うデパートとして新規オープン。館内には、往時のタイルがそのまま残されている。



## ▶中華民国外交部・ 台北賓館 旧・台灣總督官邸 [1901年築]

日本統治時代にも、迎賓館としても使用されていた。長らく非公開だったが、昨今、年に数度一般公開されている。



## ▶北投溫泉博物館 旧・台北州立公共浴場 [1913年築]

北投は、台北郊外の温泉地。この建物は元々東南アジア最大の公共温泉施設だった。戦後はさひれていたものの、地元の人々によつて1990年代に建物の復旧が進み、行政が多額の資金を援助して改修。博物館として再出発した。建物は当時の面影を残す和洋折衷で、館内には豪華な大理石の床がある。

\*写真は、表記のないものは、片倉佳史氏提供

# 元々暮らしていた民族は?

# 日本以前の統治国は?

## Q&Aでわかる台湾史

豊かな島であるところから、

古来「美麗島」と

称えられてきた台湾。

今、そこで暮らす人々の大半は

漢民族の血筋だが、実は出自は複雑だ。

また、かの地はオランダ、清、日本と

さまざまの国の統治を経ている。台湾の歴史はどんなものだったのか。

そして日本は、なぜ統治に乗り出したのか。Q&Aで紹介しよう。

**Q** 台湾は、もともとのどうな民族が暮らす土地でしたか?

台湾は、沖縄とフィリピンの間の東シナ海に浮かぶ島です。中国大陆福建省の南東に位置し、大きさは九州よりもわずかに小さいく

らい。島の三分の一を山地が占め、縁豊かであることから古くから「美麗島」と称えられてきました。

現在、台湾は旅行先として日本人にも人気ですが(私も、すでに三度訪れました)、実はほんの百年ほど前まで、よその者にとっては、決

して過ごしやすいとは言えない島でした。赤熱帯から熱帯に属する台湾では、その過酷な気候に加え、マラリアなどの風土病も蔓延していました。

また、台湾は今まで中国と

密接な関係のある土地のように思われますが、民族的なルーツは大陸とは異なります。台湾にもともと暮らしていたのは、マレー・ボリネシア系(南洋諸島)の人々です。さらにその中で、大きく九つの

民族に分かれ、それぞれ言語や風習が違つたため、部族間の抗争もしばしばでした。

そこへ、中国大陆から漢民族が渡来します。十六世紀頃、まだ漢民族よりもボリネシア系の人々の方

方が多かつたといいます。徐々に原住民族は山間部へ追いやりられていきます。一方で、民族間の混血も進みました。今、台湾の人々の大部分は漢民族系の血筋ですが、実は「出自」はとても複雑なのです。

**Q** 台湾は最初にどこの国の支配下に入りましたか?

十五世紀後半から、台湾は倭寇(日本や中国沿岸を荒らす海賊)の基地のひとつとなっていました。そこで明王朝が取り締まりに力を入れ、十六世紀にはようやく姿を消していきます。

その後、台湾を初めて「領有」したのはオランダでした。一六二四年のことです。当時のオランダはヨーロッパ諸国の植民地合戦に出遅れて、ようやくインドネシアのバタヴィア(ジャカルタ)に拠点を置いたところでした。しかしそこから中国や日本へ貿易船を出すには、少し遠い。そこで中継基地として地理的条件の良い台湾に目をつけたのです。明王朝も、台湾を自国の領土とは考えていました。そのため、オランダの支配に簡単に同意しました。

オランダの統治下では、キリスト教(信)でも、どう(信)でもない酒落(リケッサウ)の名で漬じられる

上: 開拓成功は、「國姓爺合戰」では「知曉内(わとうない)」の名で漬じられる

水瓶を運ぶ原住民。  
アム族の人々



河合 敦  
Kawai Atsushi

●歴史研究家●

PROFILE 昭和四十年(一九六五)、東京都生まれ。第十七回郷土史研究優秀賞、第六回NTTトータル大賞優秀賞を受賞。執筆活動の傍ら、多摩大学経営情報学部講師として教鞭をとる。

近著に、「日本人は世界をいかにみてきた?」、「ニユースがよくわかる教養としての日本近現代史」など。

ト教の宣教師によって、西洋文化がもたらされました。また南部の開発が進み、台南の発展の基礎が築かれたのもこの頃です（北部は、一時、スペインの占領下にありました）。

オランダは次第に明が気ついでいなかつた、台湾の「価値」を見出します。農業を奨励し、サトウキビ栽培や鹿の捕獲などによって莫大な利益を上げたのです。ただ、あくまでオランダのやり方は、後先考えずに入植の限りを尽す「植民地経営」にすぎません。事実、台湾の鹿はほぼ絶滅していますし、現地の人々の反乱も絶えませんでした。

十七世紀半ば、明の鄭成功の蜂起によって、三十八年間にわたるオランダ統治は終焉を迎えます。

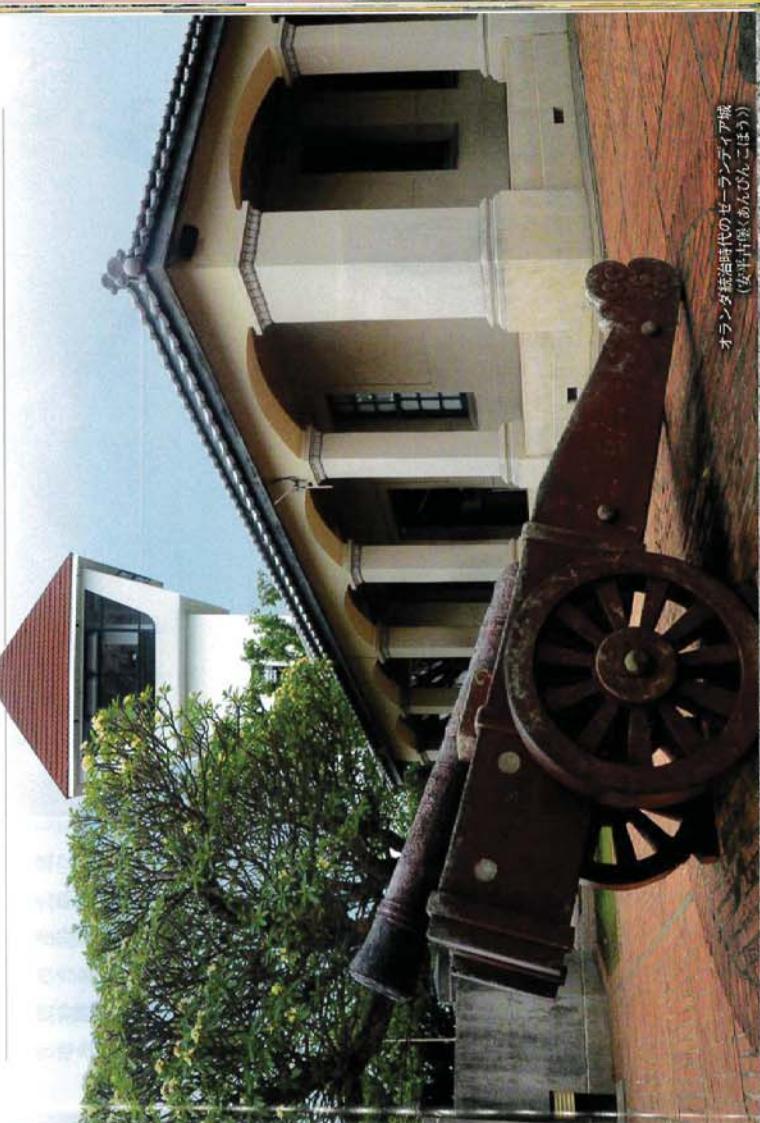
### Q 3 鄭成功の治世は長続きしたのでしょうか？

鄭成功は日本で人形淨瑠璃や歌舞伎として人気を博した『國姓爺合戦』の主人公・和藤内のモデルになった人物です。彼はオランダ

を駆逐し、台湾で初めて自治を開始しますが、初めから台湾独立を目指して運動していたわけではありません。

十七世紀前半、中国本土では洲民族系の清王朝が立ち上がり、明王朝は虫の息でした。鄭成功の父親・鄭芝龍は、海賊の頭領で義侠心が強く、明王朝を立て直すべく動きます。結局、明は一六四四年に崩壊。鄭芝龍も無念のうちに清に降りますが、鄭成功は父の意志を継ぎ、新天地・台湾で明の再興を目指します。オランダに敵愾心を抱いていた台湾の人々も鄭成功を歓迎、協力したため、オランダのゼーランディア城は陥落し、一六六二年、オランダは台湾から撤退しました。

こうして鄭氏の台湾統治が始まりますが、現地人の期待とは裏腹に重税を課したため、反発が強まりました。また、鄭成功は台湾に到着して一年足らずで亡くなってしまい、後継者を巡る内紛も絶えず、一六八三年、台湾もついに清

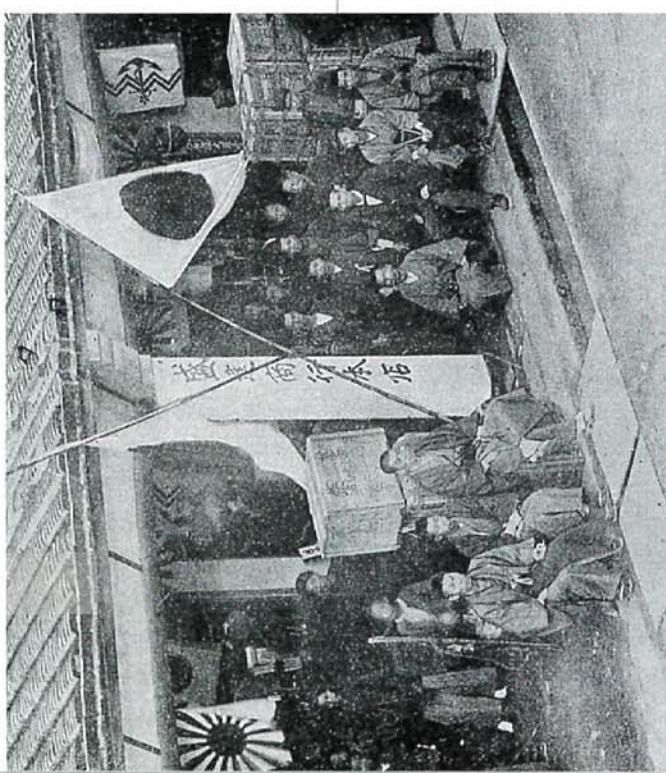


の統治下に入れます。

とはいっても、清が台湾を押さえたのは、ここを拠点に明という漢民族国家が復活するのを阻止するために、台湾そのものに魅力を感じていたわけではありません。それゆえ、基本的に支配は消極的で治

安対策にのみ重点が置かれました。

それでも、オランダ時代と同じく現地民の反乱は後を絶ちませんでした。事実、五年に二回ほどの高頻度で大きな武力蜂起が発生しており、清朝も統治には苦労したようです。



日本の国旗を掲げる盛進歩行本店（台湾名所写真集）より、国立国会図書館蔵

### Q 4 日清戦争に勝利した日本は台湾を割譲されます。日本にとって、台湾はどんな魅力のある土地でしたか？

十九世紀半ば、歐米列強の進出に伴って、清王朝の勢力は衰えていきます。そして一八五八年の天津条約によって、清は列強に台湾を開港することになります。

まだその後、明治維新を迎えた日本も台湾に関与するようになります。明治四年（一八七一）琉球の漂流民が台湾に流れ着いた際、その大半が原住民に殺害された事件を受けて、明治七年（一八七四）に台湾出兵を行なつたのです。これが日本と台湾の歴史上での本格的な「出会い」でした。

さらに明治二十八年（一八九五）、日清戦争に勝利した日本は、下関講和条約で清から台湾を割譲されます。ここから、太平洋戦争終結までの約五十年間にわたる日本統治時代が始まることです。

日本が台湾を欲したのは、軍事的な理由からでした。台湾は、東

シナ海の喉元に位置します。清や歐米の船が往来する東シナ海において、日本船が航海の安全を保つためには、台湾に拠点を築くことが必要だったのです。

さらにその後、総督府の指導により砂糖など輸出産業が発達すると、台湾は経済的にも日本を支える存在になります。明や清にとつては「化外（未開）の民が住む土地」として輕視されていた台湾も、日本にとっては非常に価値のある土地となつたのです。

### Q 5 総治開始にあたって、台湾の人々は日本をどのように受け入れたのでしょうか？

統治当初、日本はオランダや清同様、統治に大変な苦労をしました。ひとつが、Q1でも述べた風土病です。台湾は「癪病の地」とも称されるほど、伝染病の跋扈する土地でした。日清戦争中も、台湾に進攻した日本人の多くはマラリアで亡くなつたといいます。

さらに深刻だったのが、士匪の

# 台灣の歩みと日本の統治

年表

西暦	和暦	出来事
1544		ポルトガル船、台湾沖を通過。「イラ・フォルモサ(蘭しき島)」という言葉を残す(推定)
1624		オランダ人、台湾南部に入植。セーランディア城を築く。以後、37年間統治が続く
1626		スペイン人、台湾北部に入植
1642		オランダ艦隊、スペイン勢力を駆逐
1661		鄭成功軍、オランダ勢力を駆逐
1683		鄭氏政権、清國軍に降伏
1852		児玉源太郎、徳山藩士・児玉半九郎忠頼の長男として生まれる
1871		琉球から漂流民69人、台湾南部で殺害される(牡丹社事件)
1874		日本軍、西郷從道の指導のもと、台湾に出兵(台台の役)
1885		清の閻錦伝、台湾巡撫(知事)として土地調査や鉄道敷設にあたる
1894		台湾の首府、台南から台北に移る
1895	明治28	日清講和会議。台湾、日本に割譲される。台湾南部で殺害される(牡丹社事件)
		柳山資紀、初代台湾總督に就任。以後50年に及ぶ日本の統治、始まる
		児玉源太郎と後藤新平、日清戦争賠償金の検査実施
		後藤、台湾の阿片問題に関する意見書提出
		平井数馬ら六氏先生、医師に殺害される
1896	29	桂太郎、第2代総督に就任
1897	30	乃木希典、第3代総督に就任
1898	31	モリソン山、明治天皇により「新高山」と改称される。富士山より高い山が日本領土内に誕生したことにより由来
1899	32	児玉源太郎、第4代台湾總督に就任。以後、土蔵招撃をはじめ、後藤とともに民政に尽力
1900	33	後藤新平、台湾總督府民政長官に。以後、衛生、交通、産業、教育などの充実に尽力
1901	34	児玉、陸軍大臣を兼務
1903	36	新渡戸稻造、児玉・後藤の強い要請により、総督府民政部殖産局長に
1904	37	児玉、内務大臣と文部大臣を兼務
1906	39	児玉、台湾總督を免ぜられ、佐久間左馬太が第5代総督に
1908	41	児玉、脳溢血で死去(享年54)
1910	43	長谷川謹介が中心となる台湾總督鐵道完成
1915	47	八田與一、総督府の土木技術に
1918	50	安東貞美、第6代台湾總督に
1919	51	明石元二郎、第7代台湾總督に
1920	52	台湾總督府官舎、完成。デザインは公募され、辰野金吾の弟子・辰野宇平治の原案に、同じ辰野の弟子・森山松之助が手を加えた
1922	54	嘉南大圳計画、着工
1928	昭和3	浜野彌四郎計画・設計による台南水道竣工
1930	5	鳥山頭ダムの堰堤完成、嘉南大圳計画が完成する
1942	17	八田與一、南方開發のため乗り込んだ船がアメリカの魚雷攻撃により沈没、殉職(享年56)
1945	20	大東亜戦争終結
1946	21	八田與一夫人・外代鶴、鳥山頭ダムの放水路に投身自殺(享年45)
1947		中国国民党政権の部隊が到着、台湾人の国籍が中華民国に
1952		勅令により、台湾總督府、正式に廃止される
1972		タバコの密売を巡る騒動から市民と警察が衝突、多数の死傷者が発生(二・二八事件)
1990		日華平和条約調印、日台の国交樹立
		日中邦交正常化(日中共同声明の発表)に伴い日華平和条約破棄、日台断交
		李登輝、第8代總統に就任。以後台湾の民主化が加速

参考文献:伊藤謙「台湾(中公新書)」、小林道彦「児玉源太郎」(ミネルヴァ書房)他  
【歴史街道2016.5】

存在です。オランダ・清時代から在地のゲリラ勢力(土匪)の反乱は相次いでいましたが、それは日本統治時代も変わりませんでした。初代から第三代までの総督たちも、児玉源太郎、乃木希典はいずれも、鳳毛麟趾と土匪が脇廻する台湾の本質を変革できないまま、任せを解かれています。

これに真に向から立ち向かつたのが、第四代台湾總督・児玉源太郎と民政長官・後藤新平です。後藤と児玉は、台湾の衛生環境の整備に力を注ぎ、土匪に対しては「飢と鞭」で対応しました。まず、現地のインフラを整備し、その工事に土匪の人々を雇用するなど、彼らの目線に立った施策を行いました。児玉や後藤が自ら土匪の首領に会つて論すこちもあつたといいます。一方で、それでも反抗する勢力は断固征伐しました。後藤の就任から五年の間に、台湾人口の一八一七ント以上(約三万三千人)が処刑されたといいますから、台湾側の反発の烈しさがよく分かります。

多民族社会の台湾では、部族によつて習慣も言語もばらばらです。そこに見慣れない日本人が現われたのですから、確かに彼らにとつても威厳たつたでしょう。当時は教育環境も整つておらず、「話し合いで解決」というよりは、「見知らぬ者は敵だ」の精神だったのかもしれません。

一九二〇年代頃にはようやく日本の統治は描きなく安定してきます。例えば昭和五年(一九三〇)、山地原住民が日本人百人以上を殺傷する「霧社事件」が発生した際には、台湾中に衝撃が走ったといいます。裏を返せば、その頃までには、台湾の人々が日本に反抗するのは「衝撃的」だと思われるほど、統治が安定していたということでしょう。

## Q 日本が去つた後、台湾はどうのような道を辿りましたか?

昭和二十年(一九四五)八月、日本は太平洋戦争に敗れ、外地のす

べてを手放すことになります。そして翌年五月末、台湾總督府が廢止されました。

これに伴い、台湾に住んでいた日本人は本土に引き揚げを命じられます。ひとり現金千円と食糧だけが支給され、日本に持ち帰ることが許されたのは、リユックサック二個分程度の荷物のみ。当時台湾に暮らしていた日本人約四十万人が強制帰国させられたわけですから、数々の別れの悲劇も生まれました。

日本に代わって、台湾を治めたのは中国国民党の係介です。国民党の政治は、経済破壊や社会混乱を引き起こし、現地民の不満は鬱積する一方でした。それでも政府は、政府に抗議した市民たち推定二万人以上を殺害する「二・二八事件」(一九四七年)に象徴されるように行政を駆逐し、弾圧を継ぎました。ようやく台湾の民主化が進むのは、一九九〇年に李登輝が総統に就任した頃からで、その後二十年ほどの間に、台湾は政治・経済・文

化的に目覚ましい発展を遂げています。

台湾は、歴史的に、オランダやスペイン、清、日本、中国国民党など、日暮ぐさしく支配層が変わり、ほとんど自治が続いていません。これだけいろいろな国の支配下に置かれた歴史がありながらも、今、我々日本人が台湾を訪れるところが親日的な雰囲気や、「日本に似た」感じを覚えます。事実、総督府の庁舎など、日本統治時代の建物は台湾には多く残っています。台湾の人々は、決して日本を破壊しようとしなかつたのです。私は長年、高校で日本史を教えてきましたが、台湾に関して、教科書では「下関条約で日本に割譲された」というくだりで少し触れられるくらいで、生徒が台湾の通史を学ぶ機会はほとんどありません。一番身近な親国・台湾の歴史を、日本人はきちんと学ぶべきではないでしょうか。

# 後藤を支えた台湾鉄道の父

## 長谷川謹介

「責任感が強く、あくまで完全を目指す

人物だったので、安心して任せた

ことができた。後藤新平がそう語り、

絶大な信頼を寄せたのが、縦貫鉄道を全通させた長谷川謹介である。

「台湾鉄道の父」と見玉、後藤との絆とは

### 計画を前倒しにして 完成した縦貫鉄道

台湾の鉄道の歴史は清国統治時代末期、台湾巡撫(知事)の劉銘伝の時代に遡る。しかし、清国が設けた鉄道施設は稚拙で、大規模輸送機関と呼べるものではなかった。

明治三十一年(一八九八年)一月、児玉源太郎が第四代台湾總督に就任すると、民政局長に後藤新平が起用された。児玉は後藤が着任するや、官設鉄道の敷設を立案、十箇年

継続事業として工事

は始まった。

この時、技術方面の総責任者に抜擢されたのが長谷川謹介だった。

長谷川は安政二年(一八五五)、山口県小野田の出身。明治七年(一八七四年)に当時の鉄道寮に入寮して各技術を習得、その後工部省技手となる。大正七年(一九一八年)に鐵道院副総裁をもつて引退するまで、半世紀近く日本の鉄道に奉職した人物である。



長谷川が台湾に聞

わつたのは、明治三十二年(一八九九年)からの十年ほどだ。当時は官職を辞し、日本最初の私鉄とされる日本鐵道の技師となっていたが、後藤の招きを受けて台湾でその能力を發揮することになった。

長谷川は着任するや測量隊を組織し、各地へ派遣、自身も現地に赴いて状況を把握することに努め

**PROFILE** 昭和四十四年(一九六九年)生まれ、神奈川県出身。早稲田大学教育学部卒業後、出版社勤務を経てフリーに。九十年代後半から台湾に居を移す。『台灣に生きていた日本人』『日暮里真が語る台湾』『日本統治時代の50年』など著書多数。

上:長谷川謹介(写真提供:渡邊田紀氏)

た。同時にセメントや木材、石材などの建設資材を輸入するため、一年のうちに三度も上京しているまさに想像を絶する働きぶりだった。

当時の鉄道建設は一刻も早く、かつ僅かでも先に線路を伸ばすことが求められた。長谷川も不要不急

の箇所は後回しにして、経費を切り詰めつつ大胆に工事を進めた。

そして明治四十一年(一九〇八年)四月二十日、縦貫鉄道は全通を果たす。明治三十二年に予算二千八百八十万円の十年計画が始まった工事は予定よりも一年ほど前倒しで終了したが、そればかりでなく経費も百三十万円節約した上で工事完了だった。

物資の不足、疫病の蔓延、運搬の困難、人手不足、自然の猛威と困難の折り重なる悪環境の中で工事は進められたが、長谷川の手腕により、当初想定されていた以上の成果がここに実現したのである。人々は長谷川を「台湾鉄道の父」と慕い、台北駅前には長谷川の像が置かれた。

### 児玉、後藤との絆

長谷川は実直な人柄で部下から慕われることもなく、児玉や後藤からも絶大な信頼を得ていた。後藤は、次の言葉を残している。

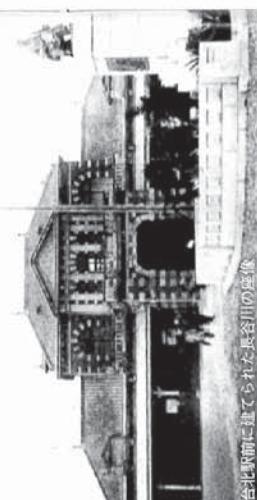
「自分は台湾を去るまで鉄道部長の職にあつたが、それは名義だけのもので、鉄道建設についてはすべて長谷川に一任していた。自分は冒頭を捺していただようなもので鉄道のことはほとんど知らない。それは技術長に長谷川という人物を得たからに他ならない。長谷川は責任感が強く、あくまで完全を目指す人物だったので、安心して任せることができた」

実際、民政局長の地位にあつた後藤は多忙を極めており、現場で采配を振るったのは常に長谷川だった。そして、後藤の期待に長谷川は完璧をもって応

ている。長谷川が赴任した際、台湾にはすでに多くの技術者や作業員がいた。同時に、本土から優秀な人材を新たに呼び必要があった。当然画者の間には萬藤が生まれたが、こういった悩みはかつては後藤も味わつたものだった。大事業には、人心を掌握する力量のみならず、より広く全体に気を配り、環境を整えられる指導者が不可欠だ。それが、後藤にとつては児玉、長谷川にとつては後藤であったと言える。

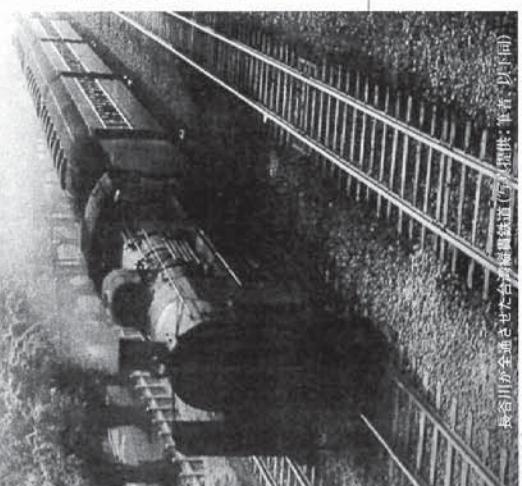
さらに言えば、合理主義に徹する児玉の人柄も、長谷川に影響を与えていた。長谷川は鉄道の運用効率を強く意識し、縦貫鉄道建設についても大がかりな経路変更を断行している。南部においても築港間もない高雄の将来を見据え、「無駄のない輸送経路の構築が台湾の未来を支える」という言葉を残し、鉄道と港湾の連携を重視した。厳格な合理主義と先見の明は、児玉譲りのものに思えてくる。

縦貫鉄道は基隆から打狗(高雄)



台北駅前に建てられた長谷川の座像

までの四百八・五キロに及ぶ。開業式典は開通から半年が過ぎた十月二十四日に台中で挙行された。全通後も勾配区間の解消や複線化、高速化などが進められたが、これは長谷川が育てた人材が受け継いだ。長谷川もまた、児玉や後藤と同様、部下を信頼し、人材の育成を重視した。明確なビジョンを持ち、無駄なく理想に近づく努力を続ける。その精神は「難治の島」と言われた当時の台湾を変えただけでなく、現在の台湾にも受け継がれている。



長谷川が全通させた台湾鉄道

# あなたの懇意に打たれた!!

## 武士道を胸に、製糖業に尽力して

「計画通り実現できるか?」「この通りに実行すれば可能ですか?」

「わかつたよし、やろう。」新渡戸稻造が、国を思ふ一念の児玉の度量に触れた瞬間だった。培った知識を実地に生かすことを新渡戸に気づかせた後藤新平、そして無私のリーダー児玉。このコンビの後押しさを受け、新渡戸は台湾の製糖業育成に挑む。

Matsuda Jukkoku

松田十刻・作家

**PROFILE** 昭和三十年(一九五五)、盛岡市生まれ。新聞記者、

フリーランス編集・コピーライターなどを経て創作活動を続ける。

正口多聞『原稿の一八〇日間』など著書多数。

の著者 国際連盟事務次

長などの要職を歴任した

コスモボリタン、第一高

等学校(旧制)校長や東京

女子大学初代学長などを務

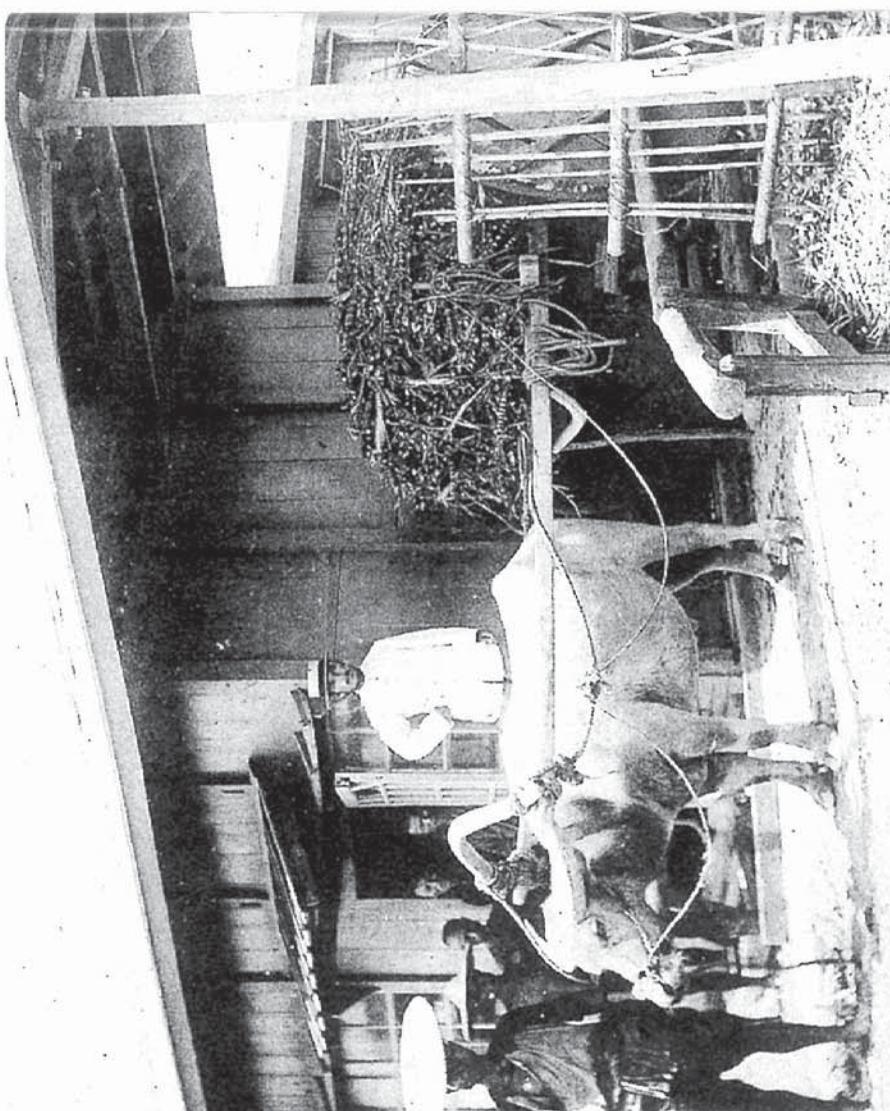
めた教育者としての印象が強

い。その一方で農政学、農業経済、植

民論などに精通し、日本最初の農学博士でも

机上の学問で良いのか

新渡戸稻造といえば、世界的な名著『武士道』



サトウキビを運ぶ牛車

あつた側面はあまり知られていない。

その手腕に目をつけ、いち早く農政の実験場に導いたのが、ほかならぬ台灣總督の児玉源太郎、民政長官の後藤新平であつた。児玉と後藤は、台灣の経済自立の要是農業にあるとの認識で一致していたが、本土とは気候風土が異なる南の島で農政を担当する過村となると見当たらぬ。

新渡戸に白羽の矢が立ったのは、岩手人の人脈による。維新後、のちに平民宰相と呼ばれる原敬や北海道帝国大学初代総長に就く佐藤昌介、日本最初の法學博士で中央大学初代学長を務める鶴見武夫など田盛岡藩士の若者は、田舎校・作人館で学んだあと、青雲の志を抱いて上京した。新渡戸もその一人である。佐藤、鶴見、新渡戸は若くして留学経験があることでも共通する。

後藤から相談された鶴見は即座に新渡戸を推薦した。新渡戸は札幌農学校(北海道大学の前身)一期生で、一期生の佐藤昌介と深い縁で結ばれていた。同校教授を務めたあと、明治三十一年(一八九八年)に『農業本論』と『農業発達史』を出版。翌三十二年三月、三十六歳で佐藤と共に日本最初の農学博士となつた。が、佐藤は同校の校長を務めており、日本を離れられない。そこで鶴見は新渡戸が適任と考えた。

新渡戸の留学中の研究内容 農学校での実験を知った児玉は思わずうなづいた。

「まさにつつてつけではないか。このような男がいたとは驚いた。何としても台湾に招かなくてはならぬ」

後藤も新渡戸の経験に目を見張った。後藤は旧仙台藩文部の留守家現・奥州市水沢区)旧藩士だが、今は岩手県人ということもあり、親近感を抱いた。

このような経緯があつて同年七月末、アメリカ・カリフォルニア州で委員会(日本名は萬里)を作つて転地農業中の稻造のもとに、農商務大臣・曾禰嘉助の書状が届いた。稻造は一読して驚いた。それまで考えもしなかつた台湾總督府への招聘を打診する内容だったからだ。

「よりによつて、台湾とは…」

稻造は息を吐いた。台湾に興味がないわけではないが、行けない事情がある。すぐさま曾禰嘉助に辞退を申し入れた。当時の心境は、札幌農学校以来の親友・宮部金吾に宛てた十二月二十三日付の英文手紙にうかがえる(宮部は札幌農学校教授で植物学者。後に文化勳章受章)。

「申し出を断つたのは、太田叔父の老齢と健康悪化のため。叔父には御恩になつていて負

い目があるから、僕の野心は犠牲にするのが正しいと考えた」(要約)

稻造は体調不良のために札幌農学校を一年前に退学していた。さらに叔父の太田時敏の健康も気がかりだった。稻造は早くに美父を亡くし、九歳から二十七歳まで太田の養子となつた(長兄の死去で新渡戸家に復帰)。アメリカへの自費留学の費用として千円を提供してくれたのも太田だった。太田への感謝を込め、療養中にまとめた『武士道』の巻頭には謝辞を記している。

稻造は官部への手紙で翌春二月に帰朝し、札幌農学校への復帰を明言したが、思いがけず一大転機となる事態が起つた。

明治三十三年(1900)二月七日、前年に『武士道』を発刊したばかりの稻造が、フライティルフィアから官部に宛てた手紙には、次のように書かれている。

「その後一身の大変動あり。台湾の招請(オファー)は非常に緊急を要す(アレクシング)。曾禰氏より三度手紙あり。また後藤新平氏より長文の外電(テーブル)を受け、言葉がない程である。加えて僕の教育上、実地の仕事に当たつたことがないため學理に走り、あやし

むことがたびたびあつた。一度は業務に当たつた方がいいと考えた。熱帯農業(トロピカル・アグリカルチャ)の一斑を学んでみたい」(要約)

曾禰の手紙には「台湾農業のためにあなたの力がせひ必要だ。児玉縦貫も後藤民政長官も強く希望している」と書かれてあつた。それ以上に、以前から興味を抱いていた後藤の長文にわたる電文を読み、脳天を直撃された。台湾の切実な現状を訴える行間から、「学問で培つた知識を実地の農業に生かさないでど

うするのだ」と叱咤する声が聞こえるような気がしたからだ。

稻造はアメリカで三年間、経済学、行政学、国際法學などを学び、ドイツで四年間、農政学、農業経済学、統計学を専攻。殖民政策の研究にも没頭した。だが、「机上の學問で良いのか。眞に農業の發展のために寄与しているのか」と自問自答を重ね、懇惫する思いがあつた。キリスト教徒として「世界の人々のために奉仕したい」との高邁な精神もある。なのに今はまだ世のために役立つてゐるとは言いかたい。

このとき後藤は「士は己を知る者の為に死す」との表現で決断を迫つたといつ。その言葉は折しも『武士道』をまとめあげた稻造の胸に強く響いた。奮起を促す後藤の電文によって侍の矜持がよみがえつた稻造は、病氣のせいにしてぐずぐずしている己の姿を恥じ、台湾へ赴く決意をした。

「わかったよし、やろう!」

稻造は北海道開拓の農業には知見があるが、南方の島は未知の分野である。このため欧洲へ渡り、一年近くスペインやイギリス、フランスなどを巡り、殖民地政策の実情や問題点



辦理(ほんり)の製糖工場(「台灣製糖株式會社事業沿革之概要」より、  
国立国会図書館蔵)

を探つた。

明治三十四年(1901)一月二十六日、稲造は神戸港に着いた。迎えの者に「至急、後藤宅を訪れるように」と言われ、上京した。後藤は流行性感冒で高熱が続いていたが、稲造を歓待し、俸給の条件を聞いた。

「俸給は関係ありません。あなたの熱意に打たれ、仕えることにしたのです」

後藤は目頭を熱くし、すぐに児玉縦貫に会うように告げた。児玉もまた稲造と忌憚のない話ををして、自分の目に狂いはなかつたことを確信した。翌二月、稲造は規則により五等官の技師となつたが、俸給は破格の一級俸だつた。いかに二人が信頼を置き、期待をかけていたかがわかる。

稲造は五月、台湾總督府民政局殖産課長の肩書で台北の總督府に着任した。当時は、のちに後藤の提案で建設される豪華な新官舎現・中華民国総統府ではなく、清國の行政庁舎を利用していた。少し奥に入ると道路は途切れ、未開地同然だった。ケリラも出没していて危険さわまりない。それでも島内の現況観察を精力的にこなした。八月には、オランダの殖民地政策と植物学者による品種改良で製糖

業が進んでいるジャワ島の現状も行なつた。ところが帝國議会に台湾産業振興策の提案を急ぐ児玉は締造に対して産業意見書を早急にまとめるように要請した。締造は十分な現地調査が前提との持論を示したが、児玉から予想外のことを言われ、それまでの常識が根底から覆つた。

「現地の事情はよくわかっている。各の植民政策に精通している君には、台湾の将来あるべき理想像を描いて欲しい」

理想像と聞いて当惑したが、理路整然とした記に合点した。締造はのちに「児玉さんに話をすれば十分でわかる。後藤さんは二十分くらいかかる」と評しているように児玉の頭脳明晰ぶりに舌を巻いた。

締造は九月「糖業改良意見書」を提出した。意見書では台湾糖業の改良方法についてサトウキビ(甘蔗)の品種改良、培養法の改良、灌漑、開墾の奨励などを具体的に論じ、製糖業振興のための糖業奨励法の制定、臨時台湾糖務局官制の制定、糖務局支局の南部地方設置、技術者の養成などを入り細を穿つ内容を盛り込んだ。これを精読した児玉は單刀直入に答えた。

「計画通り実現できるか?」

「この通りに実行すれば可能です」

「わかつた。よし、やろう!」

力強い「やろう」の声は締造の心中に後々まで残った。己の利害など考えず國家を思う一念で実行する児玉の度量の深さにも感じ入つた。十一月、締造は殖産局長心得となり、翌月には视察のためハワイ、フィリピン、オーストラリアへ向かった。

## 製糖業は軌道に乗って

意見書に基づいた糖業奨励規則及び施行細則は明治三十五年(一九〇二)六月に公布された。總督府に臨時糖務局が新設され、締造は局長に就いた。その後、締造は外遊する後藤に随伴し、半年間、台湾を留守にした。

台湾に戻った締造は約束を果すために立ち働いた。幸い總督府には札幌農学校出身の技師たちがいて締造を支えてくれた。なかでも盛岡出身の藤原吉春は台南農業試験場などを務め、製糖業の推進に一役買つた。あるとき締造は藤原を伴い、台南の農家を視察し、有力者から話を聞いた。台湾のサトウキビの在来種は高さ一・五メートルほどで太さは頗るほどしかなかった。締造はハワイから輸入した新種を勧めたが、伝統的な農法にこだわって聞き入れない。そこで農業試験場へ

連れていき、品種改良された見事なサトウキビを見せて納得させた。

締造の理念に共鳴した技師たちは品種改良や耕作改良の指導に努めた。企業誘致や製糖工場の近代化などと相まって製糖業は飛躍的に発展する。着任時の明治三十四年には約三万五千トンの生産高だったが、翌年には約五万四千トン、明治四十二年(一九〇九年)には約十一万トンと順調に増加し、経済自立の<sup>けいじじき</sup>引役を果たした(参考までに大正十年(一九一二)は約二十七万トン、昭和十二年(一九三七年)に一百万トンを突破し、世界屈指の生産高を誇る)。

この間、締造は明治三十六年(一九〇三年十月、臨時糖務局長兼任で京都帝國大学法科大学教授に就いた。先の外遊で「武士道」を著した畠山家としての名戸が高まっていることを知った後藤の推薦による。無理を押して働く締造の健康を懸念した児玉も学界への復帰を了承した。締造は翌年六月の教授専任教員後も總督府嘱託として台湾を訪れ、自分が乗じた車に乗った製糖業が児玉、後藤の後押しで軌道に乗ることを見守った。

児玉、後藤、新渡戸には気宇壮大な志と大いに終わらせない実行力があった。台湾の難を経た三人の熱意、功績は今なお当地の人々に語り継がれている。

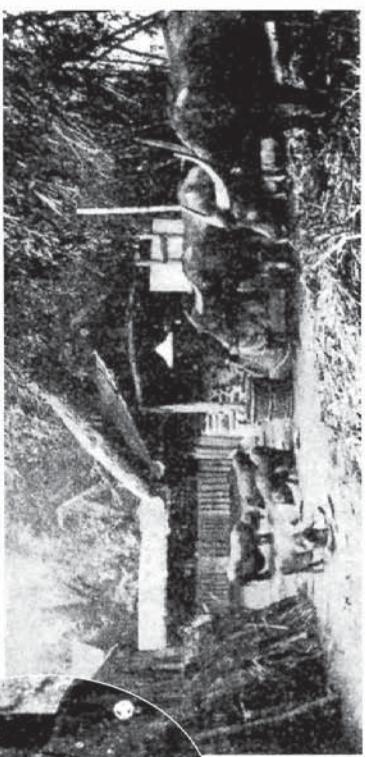
〔歴史街道2016.5〕

# 難題に挑み、発展を支えた 農業家

Column #3



台湾の地図(本誌二十一二三ページにも掲載)を見ると、島の東側には海のすぐそばまで



広がっていること

が分かる。そのため東部は開墾開拓が難しく、縦貫鐵道も山地を越けるように西側を通りている。

では日本統治時代、東側の開発は大きく後れをとつたのかといえば、そうではなかった。明治二十八年(一八九五)、日本が台灣を領有したその年に渡台し、台灣初の日本人村を拓いて、「東部開拓の父」と呼ばれた日本人がいた。賀田金三郎——政府から起任した官吏ではなく、在野で活躍した実業家である。

賀田は安政四年(一八五七)、萩の商家に生まれた。明治十八年(一八八五)に東京の藤田財閥に入社したのち大蔵財閥に移り、明治二十八年にその台灣總支配人となつた。一年後には独立、台灣で駄伝車の会社を興している。

明治三十一年(一八九八)、賀田は台灣總督府から「東部の開拓を任せたい」と打診を受ける。当時台灣總督府では児玉源太郎、後藤新平のコンビが「東部開拓は至難であるけれども、価値はある。この事業を誰に託すべきか」と頭を悩ませていた。賀田に白羽の矢が立つたのは、それまでに何度も、總督府の資金繰りに関して賀田が後藤の窮地を救つたことがあり、深い信頼を得たためであつた。また、賀田は常に「自分の仕事が国家のためになり、国民生活の向上に繋がるのが本

題」と語り、難題を持ちかけられるごとに燃える性質であった。

翌明治三十一年、賀田は總督府に、東部開発の計画書を提出。さらに同年、会社「賀田組」を設立して、東部での製糖業、畜産業、製糖業(機械を製造する事業)、移民事業、運送業などを実行に移していく。サトウキビ栽培に当たっては、新渡戸、締造とも品種の相談を重ねたといふ。

賀田の尽力によって、東部は大いに発展を遂げる。「不毛の地」と揶揄されていた花蓮を拓いて作った移民の村落・賀田村は、日本人村の手本となり、花蓮はやがて、移民に最も人気の居住地になつたといふ。

その後、賀田は事業の範囲を台灣全土に広げ、各地に支社を設立。台灣の発展のために尽くし、第五代總督・佐久間左馬太にも非常に頼りにされた。

賀田は、単に台灣で成功を収めただけではなかつた。事業で得た多額の利益は、台灣のお寺や公共事業に寄付しつづけた。モットーは「台灣で儲けた金は、すべて台灣のために使う」。殘念ながら、いま彼の名を知る日本人は少ない。しかし現地では、台灣発展を裏で支えた陰の功労者として、語り継がれる一人女のである。

〔「三井民村」より、[立憲政黨]〕